

---

# トロフィー

百合川庵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トロフィー

### 【Nコード】

N7482F

### 【作者名】

百合川庵

### 【あらすじ】

僕とトロフィーの出会いは目覚めだった。

僕が朝目覚めると、目の前にはきんぴかのトロフィーがあった。僕はベッドに寝転んでいたもので、なんだかそのきんぴかのトロフィーは壁から生えてきた黄金のきのこに見えた。僕はできるだけトロフィーに気を払わないようにした。トロフィーは圧倒的という存在感でそこにあつて、僕を威圧していた。僕はためしにトロフィーにおはよう、と言ってみたが、トロフィーは僕の言葉を無視した。それも圧倒的な無視だった。

僕はさつさと学校の制服に着替え、空っぽの鞆に財布と携帯電話を入れてダイニングに向かった。母親は僕を早起きだと褒め、父親はこれが当たり前だという風にふんと鼻を鳴らした。

僕は両親にトロフィーの話しようとしたが、思い直してやめた。彼らはとても現実的で実務的な人間なので、恐らくそんな話をする。と僕の気が狂ったと病院に直行するだろう。あるいは救急車を呼ぶかもしれない。僕はトーストとサラダを水道水で流し込み、ハンドルが少し歪んだ自転車ですつさと学校へ向かった。よく晴れて気持ちの良い朝だった。

授業をようやく終え、僕は最近あまりうまく言っていない彼女と会った。彼女は僕に会ってベンチに座るなりずっと地面を眺め、親指と人差し指で意味不明な図形を空間に描いていた。

「何をしているの？」と僕は彼女に訊ねた。

「実はね」と彼女は僕の言葉を無視して言った。「私はもうあなたとは一緒にいられないの」

「どうして？」と僕は一度目と全く同じ口調で言った。

「あなたと何かを共にするという意味がなくなっただから」と彼女は

言って、公園の出口へ走り去っていった。僕もひとりきりで公園のベンチを暖める趣味はないので、ゆっくりと自転車に乗って公園を去った。

僕は家に帰りながら昔付き合い始めた頃の僕達を思った。僕達も、幸せを太陽の光を浴びるように感じていた頃があっただ。手を繋いだけで心を震わせていた時期が、確かに僕達には存在したのだ。しかしそれはもはや過ぎ去り、虚空のものとなってしまった。僕達からはもう何も生まれないだろう。死ぬまで会話をしないかもしれない。でも、それでいい、と僕は思った。僕達は二人で生きていたわけでもないのだ。

家に帰ると、きんぴかのトロフィーは相変わらず圧倒的な威圧感でそこにたたずんでいた。

トロフィーは僕に話しかけてきた。

「良かったな」とトロフィーは言った。

「良くなんてないさ」と僕は言った。

「それでも、悪くは無いだろう」

「確かに」と僕は言って部屋の明かりを消した。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。  
よければ感想をお聞かせ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7482f/>

---

トロフィー

2010年11月3日13時56分発行